

Nārada はなぜ阿羅漢ではないのか ——俱分解脱者と慧解脱者について——

韓 尚 希

1. はじめに Musila と Nārada (S II 115-18) が智慧と禪定という涅槃に至る二つの修行系統を代弁するとみた Poussin の研究以来, Nārada は悟りに禪定が不可欠であることを示す用例として取り上げられてきた。彼が自ら阿羅漢ではないと述べてあげた例が, 禪定成就の欠如として解釈されたからである。Ray は Poussin の研究成果を踏まえて, Musila は智慧だけで解脱する慧解脱者 (paññāvimutta) を, Nārada は智慧と禪定両方によって解脱する俱分解脱者 (ubhatobhāgavimutta) を表していると述べている¹⁾。この解釈は, 慧解脱者は禪定の成就を必要としないが俱分解脱者は智慧と禪定の両方を必要としているので, Nārada には智慧は具えられているものの禪定が欠如しているために阿羅漢にはなれないと自ら述べたとの理解である。本稿では, これらの点に関して考察し, Musila と Nārada が象徴しているものは, 慧解脱者と俱分解脱者ではなく無学と有学であることを明らかにしたい。

2. 慧解脱者の禪定成就 ニカーヤとその注釈書に従えば, 俱分解脱者と慧解脱者はともに智慧を具えているが禪定の成就の仕方において区別されている。俱分解脱者は無色定あるいは八解脱の成就と智慧の完成によって解脱し (M I 477; Sv III 188), 無色定以上の成就を必要とする。一方, 慧解脱者は經典において①禪定を成就しその性質をあるがままに知り執着せず解脱する人 (D II 68-70), ②禪定を成就せず智慧によって煩惱が滅する人 (M I 477), ③成就した禪定の境地に住することを智慧によって知る人 (A IV 452-53), ④阿羅漢である弟子の異なる表現 (S III 65) の四つに分類できる。これらのうち①と③は禪定を成就する慧解脱者の用例で両方とも文脈上無色定以上を成就すると思われるので, 成就する禪定の境地において俱分解脱者との差はほとんどない。De Silva の指摘に従って理解すれば²⁾, 俱分解脱者は禪定に非常に熟練しており禪定への出入りが自由である一方, 慧解脱者は俱分解脱者ほど禪定に熟練していない点で, 両者は禪定成就の能力の違いにおいて区別される。

ここで、經典に四禪後の三明による解脱 (M I 22-23, 182-84) が説かれている一節を想起する必要がある。これは解脱のために要求される禪定は四禪であり、無色定以上の成達は必要とされていないことを意味する。ニカーヤのなかには、四禪後の解脱と関連して明示的に説かれている慧解脱者の用例はないが、ニカーヤ全体の教説の整合性を踏まえるとこの四禪を成就して解脱する阿羅漢が慧解脱者であると考えられる。四禪だけを成就する彼らは無色定を修めなければならない俱分解脱者ではなく、必然的にもう一方の阿羅漢である慧解脱者になる。慧解脱者の四禪成達は De Silva と Phrapongsak も指摘するところであり、注釈書によっても支持される。注釈書には慧解脱者に四色禪の各段階を成就する四種類と vipassanā だけを修める一種類からなる五種類があると説かれており (Ps III 188), 慧解脱者に四禪成就をするものがあることを明確に記している。以上のように、慧解脱者のうちにも禪定を成就する人がおり、禪定の成達は俱分解脱者だけに特有のものではない。

3. ナーラダが阿羅漢ではないと述べた理由 Ray が述べるように、Nārada が智慧だけで解脱する慧解脱者との対比で智慧と禪定をもって解脱する俱分解脱者を表しているならば、禪定を成就していないとしても智慧が完成しているので慧解脱者つまり阿羅漢のはずである。これは Nārada が阿羅漢ではないと述べたことと矛盾するが、この矛盾は彼がそのように述べた理由を明らかにすることによって解消する。

Musīla は縁起と涅槃に関する智慧を具えているが Savitṭha によって阿羅漢であるといわれたときに沈黙する。一方、Nārada は Musīla と同じ智慧を具えているが Musīla の場合と同様に阿羅漢であるといわれたときに、暑さに疲れた人がつるべがない井戸を見下ろし、そこに水があると知りながらもそれに身体をもって触れずに住する (tassa udakanti hi kho ñāṇaṃ assa na ca kāyena phusitvā vihareyya) ように、自分は生存の消滅が涅槃であると (bhavanirodho nibbānanti) あるがままに知っているが阿羅漢ではない (S II 117-18) と述べる。Musīla の沈黙は肯定を意味するので、彼が阿羅漢であることは確かである。しかし、Nārada は Musīla と同様な智慧を具えているにもかかわらず、自ら阿羅漢ではないと明言している。このことから二つのことが考えられる。

1) Savitṭha が質問した智慧の内容が、実は阿羅漢だけに固有のものではなく有学でも具えるものである: Savitṭha が二人にした質問は、逆観の流転・還滅縁起と涅槃に対する智に関するものである。それが阿羅漢に固有の智慧であるなら

ば、Savitṭha の質問は阿羅漢を識別するために適切であるが、縁起に関する智慧は阿羅漢だけではなく有学も具えるものである。有学と阿羅漢とでは同じ対象に対する智慧の深さが異なる。阿羅漢は智慧が完全に体得された状態である一方、有学は体得のために修行していく段階にある。有学が縁起に関する智慧をもつことを見せる用例は、この經典がおさめられている *Nidānasamyutta* に多数見られる (S II 43–55, 57–59)。Savitṭha の質問は有学にも共通する智慧に関するものなので、同じ対象に対する智慧において一人は阿羅漢、もう一人は阿羅漢ではないことが可能なのである。

2) Nārada には阿羅漢になるために必要な条件、つまり自らあげた例の「水」に対する経験がないが、Musila はそれを経験している：Poussin は水を涅槃として、その涅槃を想受滅として解釈している³⁾。水が涅槃を示しているのは確かで、想受滅を涅槃として説く用例もあるが (A IV 414–18, 453–54)⁴⁾、そうすると Nārada が阿羅漢ではない理由は想受滅を成就していないこととなる。これを認めるなら色禪と無色定を修めないと得られない想受滅が阿羅漢の条件になる。ところが、先に述べたように解脱に無色定の成達は必ずしも必要とされないの、想受滅の成達は阿羅漢である条件にはなりえない。ゆえに、水が想受滅を意味するとはみられない。実際に Nārada の例で水に例えられている涅槃は「生存の消滅」と説かれている。これは縁起において生 (jāti) の条件になる輪廻的生存 (bhava) の消滅が涅槃であること、つまり二度と生を受けない阿羅漢の境地 (D I 84; S II 171) を意味する。要するに、水は阿羅漢の境地としての涅槃であり、水に触れていないことはその涅槃が獲得されていないことである。

さて、ニカーヤにおける ‘kāyena phusitvā’ の用例のうち、その対象が水を意味していると理解しうる經典は、①色禪と無色定 (S II 123; A IV 315)、②五根 (S V 230)、③教え (S V 226–27) の三種である。このうち、五根の多様な側面に対して、有学は身体をもって触れないが無学は身体をもって触れるという②と、以前学んだ教えを完全に自分のものにするという意味の③は、無学であるために体得すべきものを示す。五根の体得を通じて悟りに至るのは確かであるので (S V 193–99)、これらの用例から水に触れることは五根の体得、つまり悟りの獲得として解釈でき、上に述べた内容と同様の意味を持つ。一方、①の用例において水に触れることが禪定の成就を意味するなら、Nārada は阿羅漢ではないので、有学のまま禪定だけを成就して阿羅漢になるという不都合を起こしてしまう。実は、阿羅漢になるためには五根すべてを平等に完成する必要がある (S V 200)、禪定における

(194)

Nārada はなぜ阿羅漢ではないのか (韓)

samādhindriya が完成しても他の要素が完成しないと阿羅漢になれない。ゆえに、水に触れることが禪定の成就のみを意味するとはみられない。Nārada が阿羅漢ではないといった理由は、単に禪定を成就していないからではなく自分が阿羅漢の境地である涅槃を成就していない有学のゆえなのである。

この解釈は注釈書 (Spk II 123) によって明確に支持される。注釈によると、生存の消滅が涅槃であるというのは有学も具える智慧であるのに Savitṭha がそれを無学のものであると考えているので、そうではないと知らせるために Nārada が自分にも同じ質問をするように Savitṭha に要請した。Nārada が阿羅漢ではないと述べたのは不還道にとどまっているから (anāgāmimagge thitattā) で、暑さに圧倒された人は不還者でありつるべは阿羅漢道である。井戸で水を見るように不還者は涅槃を見るがつかないから水を汲んで身体に触れないように、不還者は阿羅漢道がないから (anāgāmī arahattamaggassa n' atthitāya) 涅槃を対象として阿羅漢果の完成に達して坐することができない (nibbānaṃ ārammaṇaṃ katvā arahattaphalasamāpattiṃ appetvā nisīdituṃ na labhati)。

4. まとめ ① Nārada が自ら阿羅漢ではないと述べた理由は、有学であるがゆえに無学として具えるべき要素が完成されておらず阿羅漢の境地である涅槃が獲得されていないからで、阿羅漢になる智慧が具えられているものの禪定が欠けているからではない。② 慧解脱者のうちにも禪定を成就する人が存在するので、俱分解脱者と慧解脱者を禪定成就の有無だけによって区別し、Musīla が禪定を成就しない慧解脱者を表しているとみることは妥当ではない。③ Nārada と Musīla が表しているのは、俱分解脱者と慧解脱者ではなく有学と無学である。

-
- 1) Ray [1994: 198–203]. 2) De Silva [1978: 136–37]. 3) Poussin [1936–37: 191, 218].
4) 想受滅だけではなく、初禅から想受滅までのすべての段階が涅槃として説かれている。

〈略号と参考文献〉 *略号は PTS の規定に従う。De Silva, Lily. “Cetovimutti, Pannavimutti and Ubhatobhagavimutti.” *Pali Buddhist Review* 3, no. 3 (1978): 118–45. Phrapongsak, Kongkarattanaruk 「慧解脱者は四禅を必要としないのか」『パーリ学仏教文化学』26 (2012): 1–13. La Vallée Poussin, Louis de. “Musīla et Nārada.” *Mélanges Chinois et Bouddhiques* 5 (1936–37): 189–222. Ray, Reginald A. *Buddhist Saints in India: A Study in Buddhist Values and Orientations*. New York: Oxford University Press, 1994.

〈キーワード〉 Musīla, Nārada, 俱分解脱者, 慧解脱者, 阿羅漢

(東京大学大学院)